
最後まで、幸せになってくださいっ！

独楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後までらい、幸せになってくださいっ！

【Nコード】

N2265U

【作者名】

独楽

【あらすじ】

死期が見えてしまう少年の物語。

もうすぐ死んでしまう、少女を見た時、少年はある行動に移します。

死期が分かる男の子

その日は、酷い雨が降っていた。

「ママっ　ママっ！！　今日だけは、出掛けないでっ」

「どうしたの？　翔太。」

6才位の男の子が、その母親と思わしき人にしがみつきながら泣き叫んでいる。

男の子は続けた。

「今日ねっ　ママっ　死んじやうのっ　行っちやだよおお」

女の人は眉を潜めた。

いつもと違う感じの我が子を不信に思ったようだが、男の子を引き離しながら女の人は言った。

「翔太のお願いでも、それは聞けないかな。　ママね、たーっいせつな会議があるの。　ごめんね。」

女の人は男の子を抱きしめ、家を出た。

「だめっ　だめっ　だめーっ　ママっ　死んじやう…」

男の子は、泣きじゃくりながら玄関を飛び出した。
その時だった。

『キキイイイイ』

雨でスリップした車が、女の人に勢い良く突っ込んでいった。

鈍い音がして、女の人の体が宙に浮いた。

グシャツという音と共に、体がコンクリートに打ち付けられた。

一瞬の出来事だった。

「ママっ ママー!」

女の方はピクリとも動かない。

「ママあぁっ」

男の子は泣き崩れた。

雨は容赦なく男の子と、女の人を亡きがらを濡らし続けた。

変な奴

「おい、翔太って奴の噂知ってるか？」

「噂？」

「あいつ、人間が大っ嫌いらしい。」

「はっ？」

「翔太に触ろうとすると、凄い形相で睨むんだ、そして最後に……」

「最後に？」

「俺に、二度と近くなつて。」

「えーっ」

「だから、あいつには、近くな。」

遠くから、そんな声が聞こえる。

教室の窓側の方の机に突っ伏しながら、俺は、俺について噂を聞いていた。

俺は、別に人が嫌いではない。

しかし、噂の言っていることは、全て嘘ではない。

俺は、産まれた時から人に触ると、その人がいつ死ぬのか分かる。

それなのに、死んでしまう人は、助けられない。

人と仲良くなれば、その人が死ぬ時、罪悪感が生まれる。

だから、俺は極力、誰とも話さないように、触らないように、と心掛けてきた。

だから、あんな噂が出来たのだろう。

ふと、窓の外を見た。

満開の桜が、グラウンドを囲んでいる。

今日から新学期つと、心を浮かせてきたが、もうそんな噂がたっているなんて。

今年も、去年と同じか。

心の中で、苦笑いをした。

さっきの噂をしていた奴らの声が、また聞こえてきた。

「おい、でもさあ　なんか訳ありかもよ。」

「訳あり？」

「隼人さつきさあ、翔太は人の事が大っ嫌い。て言ってたけど、そんな人、いないような気がする。」

「でも、あいつには、近かないほうがいいって。」

「うーん。ごめん　隼人のお願いでも…　今回は、曲げられない。ちょっと行ってくる。」

「おっおいっ　　啓っ!」

まさかの展開だった。

俺の噂を聞いてもなお、俺に近づこうとするなんて。

思わず俺は、突っ伏していた机から、顔をはなした。

見ると、一人の男子が俺の方に、歩いて来ていた。

少し崩してある、薄茶色のある髪型に、整っている顔。

地味過ぎず、派手過ぎず、クラスの人気者候補の様に、思えた。

と、そんな事を考えていると、その男子は既に、俺の目の前に来ていた。

「凄いっ ナイスタイミングっ 調度いい所で、起きたなっ！」

「別に、寝てなかったけど…」

俺は、いつもの調子で、その男子を睨みつけた。

そんな俺の調子を軽く受け流し、男子は続けた。

「そんな怖い顔すんなってっ。」

「…。」

「俺の名前は、笹川 啓 っって言うんだ。よろしくなっ。」

その、笹川という男子を睨みつけていたままの俺だったが、笹川はニコニコしながら話し続けた。

「お前の名前は？」

「…飯島 翔太。」

「よろしくね。翔太。」

まだ態度を変えない俺を見て、笹川は一層嬉しいそうに笑った。

そして、小声で呟いた。

「翔太なら、良いかも。」

笹川は、制服のポケットから、一枚の紙切れをだし、俺の目の前に置いた。

また、小声で笹川は言った。

「…待つてるから。」

そう言ったとたん、先程のような様子に戻して、爽やかに、笹川は言った。

「じゃあっ 翔太！ これから宜しくねっ！」

そして、スキップしながら、さっきの集団に戻って行った。

「何なんだ あいつ。」

俺は思わず、小声で呟いた。

窓から入ってくる風に、笹川が置いて行った紙切れがなびいていた。

紙切れの内容

今俺は、和菓子屋の前に立っている。

あの紙切れには、こう書いてあった。

『午後3時、手土産を持って、学校の前のバス停に集合！遅れるなよっ！』

自分でも、何故手土産を買おうとしているのか、分からない。

そんな一方的な約束、破ってしまえば良いものを。

多分、俺を動かしているのは、笹川に対しての好奇心だろう。

俺にあんな態度をとった奴は初めてだった。

行くだけ行ってみよう。

そう考えた俺は、和菓子屋に入り、ドラ焼きを2個買って店をでた。

3時まで、後10分。

俺は、急ぎ足で学校へ向かった。

バス停に着くと、笹川は小さな花束を右手に、ベンチに座りながら待っていた。

笹川は、俺の姿を見るなりに、勢いよく立った。

そして、早口に話し始めた。

「翔太っ！ よかった。もう少しで遅れる所だったんだ！ ほらっ
！」

そう言って、笹川から見た右側を指さした。

見ると、路線バスがすぐ傍まで近付いていた。

「ほらっ 乗って！ 乗って！」

俺は言われるがままにバスに乗ってしまった。

「おいっ 一体何のつもりだっ。」

俺は、思わず怒鳴った。

が、ここはバスの中。

一気に周囲の注目を浴びてしまった。

肝心の笹川も、人差し指を立て口の前にかざし、静かにの、ポーズ

をとりながら、焦っていた。

むかついたが、今は静かにするしかなかった。

一体、何処に向かっているのだろう。

演技

バスで約15分走った所にある紅葉病院。

この近くでも有名な総合病院だ。

そんな病院の前に俺はいる。

「よしっ！ 着いた。 翔太、俺に着いて来て！」

笹川がそう言い、歩きだした。

「待てよっ。」

俺は、笹川を大声で呼び止めた。

すると笹川は不思議そうな顔をして振り返った。

「何だ？」

「何だ？ じゃねーよっ どういう事だ！ 説明しろよっ。」

苛立ちのこもった俺の声を聞いた笹川は、はっとした様に目を見開いた。

「あれっ？まだ、説明してなかったっ？」

「してない。」

「ごめん、ごめん。そうか、バス停で説明出来なかったのか。」

そう言うと笹川は、急に真剣な顔になって、話し始めた。

「会って欲しいって言うか、友達になって欲しい人が、この病院に入院してるんだ。」

「はっ？」

会って欲しい人？

成る程、これは見舞いなのか。だから俺に手土産を持って来いなんて言ったのか。

でも、

「何で、俺？」

笹川は、人気者に部類される方だと思う。俺じゃなくても、他にも友達はいるはずだ。

笹川は何気ないといった表情で答えた。

「自慢出来る友達を、連れて来いって言われたからだ。」

「自慢出来る…？」

「翔太ってさあ、一度決めた事は絶対に曲げなさそうだって、思った。良く言えば、信念強いかな？」

笹川はニコニコしながらそう答えた。

「お前と、いる奴らは？」

俺は思わずそう尋ねてしまった。

そしたら笹川は、ニコニコしたまま、少し悲しそうに答えた。

「学校にいる俺の友達は、本当の俺の友達じゃないから。」

「はっ？」

俺は、声が裏がえった。

「演技の俺と、皆は友達なんだ。」

「……」

意味が分からない。

「まあっ そんな事より！」

笹川はいきなり声のトーンを高めて言った。

「翔太！ お見舞い行ってくれるよねえっ？」

正直、迷ってる。

行くか。行かないか。ここまで来てしまったのだし、会うだけあつてみようか…。

「行ってやるよ。」

気付いたら、俺はそう答えていた。

「本当っ！ サンキューー 翔太っ！！」

笹川の純粹過ぎる笑い顔を見て、思わずたじろいだ。

「さあっ！ 行こう。」

「おいっ」

再び歩きだした笹川を、また停めた。

「何？」

俺は、ここまでの話で一番疑問に思ってた事を尋ねた。

「俺と、お前って、友達なのか？」

「……」

「……」

「えっ！ 友達じゃないのっ？」

「はあっ？」

間抜けな声をあげてしまった。

「……まあまあっ 細かい事は気にしない！」

そう言って笹川はスキップをしながら病院へ向かって言った。

「おおおいっ 待てよ。」俺は焦って笹川の後を追った。

……まったく。今日は、笹川とか言う奴のペースにのせられてばかりだ。

きっと、俺も新学期ということとで、気持ちが高ぶっていたのだろう。

嫌に、空が青く感じた。

なんか、むかつく。

初めての出来事

俺達は、紅葉病院に入った後、エレベーターを使い五階まで上がった。

「この階にお前の友達が入院してるのか？」

「ああ。」

少し笹川の顔が、緊張のせいで赤くなってる様に思えた。

小さな花束を大切そうに抱えて歩いている。

笹川が、いきなり停まった。

「ここだよ。」

504号室。

…なんだか、俺まで緊張してきた。

笹川は、手慣れた手つきでドアを開いた。

「よおつ 杏里っ！ ちゃんと、友達連れて来たぜっ！」

杏里？

俺は、病室のベッドの上を見た。
そこには、俺と同じ位の歳の女子が、上半身を起こして座っていた。
少し癖のある茶色の髪に、くりくりとした、大きな目。真っ白の
肌と、ほっぺと口の桃色。
まるで、天使のようだ。

頭が、ぼーっとしてきた。息が苦しい。でも、夢を見ている様な
感覚だ。

「これが俺の友達の、翔太。翔太！ 自己紹介宜しくっ！ て、翔
太？ おーい？ 翔太？」

「……」

「おーい？」

はっ！ 笹川の声で、我に返った。

「ほらっ 自己紹介！」

「おっおう 俺の名前は飯島 翔太。 よっ宜しく」

焦りすぎて、声が裏返りまくった。ちらっと、彼女を見ると、く
すくすと、笑っていた。

彼女は笑いながら言った。

「そんなに緊張しないで！あたしの名前は、松下 杏里。宜しく
っ！」

「おっおっ」

「それと、翔太って呼んでも言い？あたしのことも、杏里って呼
んで！」

「ああ。」

大分緊張が解れてきた。少しだが、余裕もでてきた。

「えーっ！翔太っ！俺の事も、笹川 じゃなくて、啓 っって呼
んで！」

「はああ？」

「…お前は、なんか気色悪いからなあ。」

俺が笑いながら答えると、笹川は、少し膨れながら言った。

「ひでーっ なあ杏里」

「うーん 啓は、そう言われても、しょうがないんじゃない？」

笹川が慌てながら言った。

「まじかっ！ てか、お前らグルかっ?!」

「あはははっ」

気付いたら、俺は二人と共に笑っていた。
なんだか、不思議な感覚だ。

それから、色んな事を話した。
たわいもない世間話だったが、なんだかとっても、楽しかった。

いつの間にか、空が真っ赤に染まっていた。

「あーっ そろそろ帰るかっ」

笹川が切り出した。

「そうだな。」

俺も賛成した。

「なあ……」

俺は、二人に声をかけた。

「何？」

「どうしたー？」

笹川と杏里がばらばらに答えた。

俺は戸惑いながら、続けた。

「また、ここに来てもいいか？」

「……………」

笹川と杏里は、顔を見合わせて、笑った。

「良いに決まってるじゃん。」

杏里が手を軽く振りながら答える。

「また、来ようなっ！」

笹川が、ニコニコ答える。

自分が、こうやって人て話してるのが、何だか、とても不思議だった。

でも、無性に嬉しかった。

俺の日常

「おうつ 待たせて悪いなっ」
笹川がにこやかに走ってきた。周りに妖精でも連れてそんな雰囲気だ。

「いや、そんな待ってねーよ」
そんな笹川にそっけない言葉で俺は答える。
冷静なふりをしていても、つい顔が緩む。

「わりー あっ バス来た！」

俺と笹川はバスに乗り込んだ。

桜の木がもう緑に染まりつつあった。あの日から、俺は笹川と一緒に杏里の見舞に行くことが、日課になっていた。いつものように、見舞に行つて、世間話して、家路につく。

「おいつ 大丈夫かっ？ ポーっとしすぎで、変な顔になってんぞ？」

笹川が俺の顔を覗き込んできた。

「はああ!？」

「冗談だよ冗談だん」

そういつて、俺を小突こうした。が、はっと気付いたようにその手を引いた。

「わりーな」

俺は言った。

「いや、別にいいんだけど… そろそろ理由、教えてくんね？」

笹川が頭をかきながら言った。

「…。」

俺はつい黙りこんでしまった。笹川はこんな俺でも気兼ねなしに接してくれる。

こいつなら、あのことを話てもいいんじゃないか

そんな考えが、ふと頭をよぎる。
が、すぐに掻き消される。

「わりー！ 人間だもん 話たくねーことの、一つや二つあるよな
っ！」

笹川は、ニカツと笑った。そして、続けた。

「頼りたくなったら、すぐに俺に相談だ！ フリーダイヤル012
0…」

「通販かよっ」

思わず、突っ込んだ。

「違う違うー!」

笹川は首を軽くふった。

「これは正義のヒーロー笹川マンを呼ぶ、おまじないなのだぁぁ」

「……」

「もしかして、俺滑っちゃった?!」

「ふっ」

俺は思わず吹き出した。

「もー 翔太のいけずう」

「キモッ」

「ひでーっ」

笹川は、膨れっ面をした。そんな笹川の顔が面白すぎて、ついに俺は爆笑した。気付いたら笹川も爆笑していた。

『次は〜 紅葉病院前〜 紅葉病院前〜』

気怠そうな声が放送された。

俺はなんとか笑いを収め、涙を拭いながら言った。

「ほら ふふっ バス降りるぞっ」

「おう! ブハッ」

気持ち悪く笑いながらバスを降りた。

「あーんり！！ 今日もいつもの持ってきたぞっ」

笹川が病室のドアを勢いよく開けながら言った。

「わぁ ありがとう！」

杏里が雪のような白い肌を桃色に染め、ニッコツとしながら言った。
それを見て、笹川もニカツツと笑う。
俺は、少し胸に重い塊を感じた。

日常の崩壊

その時だった。

「ゲホツ　ゴホツ」

杏里が突然苦しそうに咳込み始めた。

「大丈夫か!？」

俺は思わず叫んだ。

「俺、水とってくる」

そういつて笹川は病室を慌ただしく出ていった。

杏里が手で口をおおっている。ちらつと見えた手の平には、赤い液体がべったりついていていた。杏里は吐血したのだ。

今まで、こんなことなかったのに

「あつ杏里っ　お前血が……」

「啓には、言わないでっ」

俺の言葉を遮り、杏里が強い口調で言った。

そして、杏里は窓際に飾ってある花を指した。あれは、笹川が杏里の見舞に行く際、必ず持っていく花だ。

「あそこの花。啓がいつも持ってきてくれるでしょ？季節によって

違う花をくれるの。今回はコスモスね。」

俺は静かに頷いた。

「6才の時、私はこの病院に入院したの。もう死んじゃうかもしれない。そんなことずっと考えて、毎日泣いてた。

そんな時、啓が言ったの。

『この花は、俺のとっても大好きな場所に咲いてるんだよ。沢山の種類の花があつて夢の国みたいなんだ！早くばい菌なんか倒して、一緒に行こう！』

つて。啓のお日様みたいな笑顔に、励まされてきたの。」

そう言った杏里の顔は幸せそうに顔を赤らめて…

俺は、悟った。

杏里は笹川が好きなのだ。

息が苦しい。肺の中に粘土詰め込まれたみたいだ。

「啓には、絶対心配させたくないの。」

杏里はそう言つて、血を拭うために棚の上にあるティッシュをとろうと身を乗り出した。

その瞬間杏里のが大きくぐらついた。

「危ない!!!」

考えるよりも先に体が動いた。

俺は杏里の細い体をキャッチした。

俺は、杏里に触れてしまったのだ。

《寿命 あと10日》

俺の頭に流れ混んできた。

杏里が、あと10日で死ぬ？

「翔太 ありがとう！助かった… 翔太？」

「アトトウカ、アトトウカ、アトトウカ、アトトウカ…」

俺は呪文のようにそれを呟いていた。

病室のドアが開いた。

「わりー 時間かった。 あれ、杏里、翔太どうした？」
笹川が眉をひそめた。

「アトトウカ、アトトウカ、アトトウカ、アトトウカ…」

「翔太！！」

笹川が叫んだ。

俺はその声で正気になった。みると笹川が心配そうに俺を見てる。

杏里は唾然としていた。

杏里の顔を見た瞬間、俺は耐えられなくなった。

「っ！」

俺は病室を飛びだした。

アトトウカ

俺の頭をずっとコダメしている。

どうやって家に帰ったのか、俺は覚えていない。

嘘

翔太は物凄い勢いで病室を飛び出していった。

啓の動きが一瞬とまった。

が、すぐに正気に戻ったようで、啓は翔太を追うように病室を飛び出した。

そのすきに私は布団に手を突っ込んで手についでる血を拭った。

啓が戻ってきた。

「もう… 翔太… いなかった…」

苦しそうに肩で息をしている。
そして、神妙に言った。

「翔太と何かあったのか？」

「…。」

啓の目はとても不安そうだった。

「ちょっとベッドから落ちそうになって、支えて貰っただけよ。」

私は、なるべく啓から目を逸らせ、感情を表に出さないように言った。

私はちらっと啓の顔を見た。真っ青になっていた。 啓のそんな顔

始めてだ。

「支えて貰ったって… お前…」

啓はやつとのこととで私の顔を見たようだった。

「翔太の身体に触ったのか。」

啓の絞りだしたような声。私は意味がわからなくて、眉をひそめた。

「触ったのかって言ってんのっ！」

啓が大声で怒鳴った。

つい、身体が硬直した。

「っ 翔太っ！！」

私のその態度で悟ったのだろう。

啓は死に物狂いで病室を出て行ってしまった。

病室が一気に静かになった。風の音しか聴こえない。

私はベッドのシーツを強く握り締めた。

ゴトツ

物が壊れる音が病室に響き渡った。

窓の方を見ると、啓がいつも持って来てくれる花を飾っている花瓶が倒れていた。水は流れ、花は無残にも床に落ちている。

「啓… 翔太…」

私は眩いた。

何故啓はあんなにも怒鳴ったのか解らない。
今までこんなことなかつのにな。

静かに俯いた。

病室には、風の音 花瓶の水が棚をつたい床に落ちる音。そして、
私の嗚咽だけが残った。

着信

気がついたら、俺は自分の部屋のベッドの上に制服のまま俯せになつて寝ていた。

俺の部屋はもう既に真っ暗でだった。

日が沈んだようだ。

電気をつける事も躊躇わせるほどの激しい疲労感が俺を襲った。

さっきの出来事はすべて夢だったのか？

鞆の中から携帯を取り出し開けた。 笹川からの馬鹿みたいな着信履歴。 どうやら夢ではなかったようだ。

夢だったらどんなに嬉しいだろう。

俺は携帯を投げ捨て、再びベッドに身を投げ出した。

杏里は後10日で死ぬのだ。

10日しか生きられないのだ。

頭が割れそうに痛い。

ピルルルル

味気なく俺の携帯が鳴いた。 相手は勿論笹川だ。

いつまでも心配させる訳にはいかない。

あの二人には何の罪も無いのだから。

やっこのことでベッドから身体を起こし、電話にでた。

「もしもし…」

『翔太かっ?! やっと出てくれた!』

笹川の声が少し弱々しく聴こえた。

『お前と直接話したい。10時にいつものバス停にきてくれないか?』

「…わかった。」

俺は携帯を切った。

携帯の時計を見ると、9時20分だった。
どろりで部屋が暗い訳だ。

まずは、顔を洗わないと。

俺は重い身体をゆっくりと使い、洗面所に向かった。

真実

俺は、約束の時間よりも早くバス停に行った。辺りを見渡し笹川の姿を探す。笹川は、バス停よりも少し離れた塀にもたれかかっていた。夜だったが月明かりに照らされているから、周りがよく見えた。

「ごめん 待ったか？」

「いや… 今来たばっか。」

「そうか…」

「……」

笹川がこちらを見た。月の明かりのせいか、なんだかとても青白く見えた。

「今日… 杏里に触っちゃったんだよな…？」

「……」

俺は思わず俯いてしまった。

《アトトウカ》

その言葉が俺を襲う。

このままでは駄目だ。

俺は勢いよく顔を上げ、無理に笑って言った。

「ああ でも、全然大丈夫だ。」

俺はいつも笹川がしてるみたいにニカッと笑った。

それなのに、笹川は物凄く悲しい表情をした。

笹川は俺が嘘をついたって悟ったのだろう。

「翔太、そんな嘘…。」

「なあ 笹川。」

笹川は言葉を遮られたが、黙って俺の顔を見た。
俺はゆっくりと続けた。

「今回のことは事故だし、もうしょうがないことだ。心配かけて悪かった。」

「……………嘘、ついてない？」

「ああ……」

俺はわざと真剣な顔をした。

笹川は、ずっと俺を見つめてる。

心にツキンとした痛みがはしった。

「なあ 笹川。 お前杏里のことどう思ってる？」

笹川は目を丸くした。

「なんでそんなこと…。」

「今日、杏里がお前の話してた。」

俺は杏里が吐血したこと以外のことを全て笹川に話した。

全て話したあと、再び俺は笹川の顔を見た。

笹川俯いていた。

月明かりだけでは、うまく笹川の表情が見えない。

笹川は絞りだすように言った。

「翔太。今って夏だよな。」

「……？ ああ」

「杏里の部屋にはコスモスが飾ってあっただろう？」

笹川は続けた。

「夏に、花屋以外の場所でコスモスとれると思う？」

「！」

時がとまったように感じた。では、笹川の大切な場所ってのは…

「俺の大切な場所なんて、本当はどこにもない。

俺が造った空想なんだ。」

笹川の声は震えていた。

「杏里にまた元気に笑ってほしくて、あんな嘘ついちゃったんだ…」

「杏里…俺、お前を大切な場所に連れてけないんだよ…ごめん…」

「ごめんな…」

笹川はしゃがみ込んだ。

月は優しく俺達を照らしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2265u/>

最後まで、幸せになってくださいっ！

2012年1月2日00時47分発行